

蒼いポスト

おがわ麗華

ふたもじ、なぞった。意味が生まれて、わたしが生まれた。
文字で意味を与えて。手で指で、すぐにわたしを与えて、意味づけて。
名前を書いて。存在を、わたしにして。

気がつくとなわたしは父の手から零れ落ち、その声も顔も思い出すことのない生活が始まっていた。

少しの不自由はあるけれども、多くの幸福もない。一般的ではないが、道は外れていない。それが普段だから他は気にならない。

書類の申請事由など、今でも時折聞かれることがある。だから答える。

「父は離別です」

顔は無表情だが、胸の奥が痛むことを誰も知らない。

わたしの半分の父親はどこかへ。

わたしの体の半分がどこかへ。

わたしは半分意味を失って。

けれども名前を書くと、わたしにはきちんと半分が生まれてくる。

すぐにこの手で戻ってくるから、わたしはいつでもわたしでいられる。

わたしの名前は父親がつけてくれたもの。

母親と父親と、希望の名前があったけれども、わたしの今の名前は父親が命名した。意味は聞きそびれたままだ。

今はもうわたしと父親をつなぐものがこの名前しか無い。わたしをわたしとした名前しか、ないのだ。

麗華。

名前を書いて、わたしになって、父と結んで、いまもわたしはわたしでいられる。